

# 髮切虫

夢野久作

青空文庫



桐きりの青葉が蝙蝠こうもり色に重なり合つて、その中の一枚か二枚かが時折り、あるかないかの夕風にヒラリヒラリと踊っている。

うるんだ宵星の二つ三つが、大きく大きくその上にまばたき初めると、遠く近くの魂がヒツソリと静まり返つて、世界中が何となく生あたたかい悪魔のタメ息じみて来る。

その桐畠の片隅の一番低い葉蔭に在る、太い枝の岐わかれ目に、昼間から一匹の髪切虫かみきりむしがシツカリと獅し噛み付いていた。その髪切虫が、そうした悪魔気分そそに示唆そそられて、ソロソロとその長い触角を動かし初めた。

髪切虫にとっては、触角を動かす事が、つまり、考える事であ

った。見る事であつた。聞く事であつた。嗅ぐ事であつた。あらゆる感覚を一つに集めた全生命そのものであつた。その卵白色とエナメル黒のダンダラの長い長い拋物線型に伸びた触角は、宇宙間に彷徨ほうこうしている超時間的、超空間的の無限の波動を、自由自在の敏感さで受容うけいれるところの……そうして受入れつつユラリユラりと桐の葉蔭で旋回しているところの……変幻極まりない鋭敏な、小さい、生きた、アンテナそのものであつた。

蝙蝠色に重なり合つた桐の葉の群れのズツト向うの、青い半円型の草山の蔭の地平線から、ボヘメヤ硝子色ガラスのサーチライトが、空気よりも軽く、淋しい、水か硝子のように当てどもなく、そこ

はかたなく撒き散らされていた。だからその草山の方向に、何気なく触角を向けている中に髪切虫は、何ともいえない大宇宙の神秘さをヒシヒシと感じ初めて来たのであった。

その草山の向うの、海の向うの、大陸の向うの、星座の向うの、まだまだずっと向うの、大地が作る半円球越しの何千里か向うの広い広い土地は、まだその日の正午近くらしかった。その焦げ付く程熱した、沙漠の塵埃ほこりだらけの大空に、何千年か前から漂い残って、ニュートンの引力説に逆行し、アインシュタインの量子論を超越した虚空の行き止まりにぶつかって、極く極くデリケートな超短波の宇宙線に変化しながら、やっと引返して来たイーサーの靈動が、ほたる蛍の光のように青臭く、淋しく、シンシンと髪切虫の

触角に感じて来るのであった。

それはナイル河底の冥府めいふの法廷で、今から一千九百六十五年前に、記録係のトートの神が読上げた、神秘的な、薄嗻うすがれた声が大空の涯から引返して来た旋律に相違なかった。

青桐の幹にシツカリと獅噛み付いた髪切虫の触角がピインと一直線に伸び切って、眼にも止まらぬ位すばらしく細かく……ブルン……ブルン……ブルン……ブルブルブルルルルルルルルルル……と震動し初めた。

エジプトの

御代しろしめす

美しき

クレオパトラの

わが女王きみは

笑はせたまはず」

国々は

うれひに鎖とぎし

民草は

悲しみ濡れて

朝まつり

いとおろそかに

夜のおとど

みあかし暗く

まさびしき

御み閨ねやのうち

わが女王きみは

寝がへらせつゝ

ひそやかに

歎かせたまふ」

われはこれ

美くはしの女王

エジプトの

神々の

思ふこと

ねごふこと

何一つ

ただ一つ

わが知れる

ものみなは

たどくと

天地は

御代を治めて

力をかねて

とゞかぬは無く

かなはぬはなし

不足なけれど

みちたらぬもの

生きとし生ける

などかくばかり

ものうきやらむ」

古くよごれて



ものみなは

めぎめては

ちりひちに

おなじ日と

さびしらに

汗ばみつかれ

又ゐねむりて

まみれ腐れてくさ

おなじ月のみ

かゞよひ渡る」

われもまた

はるあき

春秋を

ああわれは

エジプトの

神々の

あだいたづらに

老いて行くのみ

かくはかなくも

御代を知りつゝ

まもりうけつゝ

此の広き

山と河にも

おもしろく

をかしき事を

何一つ

見出でぬまゝに

老い行きて

死に果てむ身か」

御涙

ハラ／＼と落ち

ほのぼのと

夜は明けわたる」

折しまれ

あなめづらしや

わがきみ  
女王様の

御声として

カヤ／＼と

笑はせ給ふ」

わが女王きみの

いづくより

一匹の

かしこくも

此上こよもなく

黄金こがねにも

御髪おんぐしを

啄ついばませ

カヤ／＼と

御圍みねやぬちに

迷ひ入りけむ

髪切虫を

捕はせ給ひ

興がらせつゝ

たとへ難かる

あたへ給ひて

喰はませ給ひて

笑はせ給ふ」

あなをかし

髪切虫よ

おもしろの

髪切虫よ

いつまでも

髪切り飽かず」

あかつきの

雲の波打つ

はてしなき

わが黒髪を

残りなく

切りつくさむとや

丸坊主に

しつくさむとや」

埃エジプト及の

御代を知る身を

はばからね

髪切虫よ

汝なれこそは

青光る

美うるはしの

われ死なば

髪切の

かぎりなく

はてしなく

黒雲の

白浪の

匍はひまはり

虫の王なれ

髪切虫よ

「髪切虫よ」

汝なれに慣ひて

虫と生まれて

恋を重ねて

卵を生みて

天あぎるきはみ

打ち寄るかぎり

且つ飛とびかけり

闇といふ

女てふ

こと／＼く

青空の

黒つちの

人間の

口づけの

美しき

とことば  
永久永遠に

あなをか  
し

おもしろ  
の

闇に忍びて

女の髪を

喰べつくして

たなびくところ

くゞまるところ

さまよふきはみ

結ばほるかぎり

坊主あたまを

はや  
流行らせむかな

あなおもしろや

かみきり虫や

ヒヒヒホホ

カヤくくくく」

女王きみの御代

これより朗ほがらかに

大御心

ひらけ浮かれて

歌宴うたげして

舞ひ給ふとて

腋わきした下の

おん渦うづまき巻毛

こと／＼く

抜かせ給ひて

かの虫に

あたへ給ひぬ」

さればわが

女王きみの御果て

み誓ひの

固きにまかせ

御みひつぎ柩この

彼かの虫むしの

秘ひめやかに

女わがきみ王み様の

生あれまさむ

美うるはしき

永とこ久とは永とこ遠はに

さわがきみれば聞きけ

女わがきみ王み様の

御みひつぎ柩この

御み片は隅ぐみに

木ミイラ乃の伊いを作つくり

納なめまつりつ

髪かみ切き虫むしの

来き世よを待まちね

坊ぼく主しゅ頭づを

流は行やらせむ為ために

後ごの世よの人ひと

木ミイラ乃の伊い納なめし

おん片隅はぐみに



わがきみ  
女王様の

みぐしは  
御髪喰みつゝ

髪切虫

今も啼なくなり

千年の

神秘をこめて

キツチく……キツチく……

……ギイくくくく……

「キツキツ。ギイギイギイギイ」

桐の葉蔭の髪切虫は、思わず啼いてしまった。その拍子にイーサーの霊動がフツツリと感じられなくなってしまったが……。

……しかし……それでも若い髪切虫は感激にふるえ上ったのであった。

ただ残念なことに、自分が果して二千年前の埃エジプト及女王クレオ

パトラの生れ変りなのか。それとも女王様の寝棺の中に秘め置かれた髪切虫か、鱷河馬アマムにも喰われず、太陽神オシリスにも叱られずに二千年後の今日こんにち、輪廻りんねてんしょう転生の道理に恵まれて、呼吸いきを吹返して来たものか、その辺のところガサツパリ判明しなかつたが、やがて間もなく、そんな事はどうでもいい事に気が付いたので、髪切虫は一層、朗かになつた。

「そうだ。妾わたしはこれから恋を探さなければならぬ。そうして卵を沢山に生んで、可愛い子供をウジャウジャ撒まき散らして、世界中の女の髪毛かみをみんな朗かに啖たべさせて、一人残らずクルクル坊主にしてしまわなければならぬのだわ」

けれども彼女は恋というものがドンナものか知らなかった。：  
：一体恋なんていうものはドンナ処に、ドンナ風にして在るもの  
だろう……と思つて、ソロソロと桐の葉の上に匍い上りながらそ  
こいらを見まわした。

桐島の周囲の木立は、大きくまばたくゆうずつ夕星もとの下に、青々と暮  
れ悩んでいた。その重なり合つた枝と、葉と、幹の向うに白々と  
国道が横たわつていて、その向うのポプラの樹が行儀よく立並ん  
だ間から、何だかわからない非常に美しいものが光つて見えた。

それは何ともいえず匂やかな、柔かい薄桃色の絹シェードの光  
であつた。

「アラツ。まあ何て神秘的な光でしょう。……妾は思い出したわ。

虫の血で染めたパピルスの行燈あんどんを……ナイル河に臨んだ王宮の燈ともしび火を……妾の恋はキットあそこに在るのに違いないわ」

それから彼女はシツカリと畳まっている左右の羽根を生れて初めて、夕ゆうやみ暗の中でユルユルと拵おぼげてみた。なやましい湿度を含んだ風が羽根の裏側にヒツソリと沁み渡った、と思うと彼女は早や、青い青い夕星の下の宵よいやみ暗を、はるかはるかの桃色の光に向つて一直線に飛んで行くのであつた。

「アツ。お父様……髪切虫が来ましたよ」

「ナニ。髪切虫が……」

「ええ。お父様が今夜は違った虫が捕りたいから誘蛾燈おっしやに赤いシエードを掛けとけて仰言おっしやったでしょう。ですからそうしとい

たら蝶々は一匹も来ないでコンナ髪切虫が……」

「ううむ。面白いのう。甲虫は一体に赤い色が好きなのかも知れんのう」

「オヤツ。この髪切虫は普通のと違っている。この間お父様が大學で見せて下さった化石の髪切虫によく似てますよ。ね。ホラネ。身体が瓢ひょうたん型からだになって、触角がズツト長くて……おまけにトテモ綺麗ですよ。卵たまご白色と、黒天鷲びろうど絨色のダンダラになって……ホラ……ネ……」

「フウム。成る程。これは珍しいのう。三千年ばかり前のツタンカーメンの墓の中から出て来た、実物の木乃伊ミイラとはすこし色が違うが、これがホントの色じやろう。今はモウこの世界から絶滅し

ている種類だと聞いているのに……おかしいなあこんな処に居るのは……」

「その木乃伊ミイラの棺の中から生き返った奴が埃エジプト及から飛んで来たのじゃないでしょうか」

「アハハハ。そうかも知れんろう。とにかく標本にしといて御覧……学界に報告してみるから……」

青酸瓦斯ガスにみちみちた硝子ガラスの毒壺に入れられるべくピンセットで挟み上げられた時、彼女は思わず手足と触角を振りまわして悲鳴をあげた。今を最後の千古の神秘をこめて、

「ギチギチギチギチ。イチイチイチイチ。ギイギイギイ。カヤカヤ……カヤカヤカヤカヤカヤ……」







# 青空文庫情報

底本：「夢野久作全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年8月24日第1刷発行

入力：柴田卓治

校正：kazuishi

2000年10月25日公開

2006年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 髪切虫

夢野久作

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>